

吼えろアジア——東アジアのプロレタリア文学・芸術とその文化移転

1920-30年代

発表要旨

2022年7月30日 13:00-17:00

Session 1 セルゲイ・トレチャコフ

Session 2 村山知義

2022年7月31日 10:00-17:00

Session 3 ジェンダー、セクシュアリティ、労働

Session 4 移民、植民地、東アジアの表象

Session 5 翻訳、プロパガンダ、アダプテーション

Session 1-1 セルゲイ・トレチャコフ 13:30-13:50

咆吼のこだま

——『吼えろ、中国』とその中国・台湾での翻案

鄢 定嘉（国立政治大學）

2015年11月6日、『吼えろ、中国』はワルシャワのポフシェチヌイ劇場で上演された。演出家のパヴェル・ルサクは、トレチャコフの脚本が1924年6月19日に中国の万県で起きた実際の事件に基づいていると説明した。その筋書きは、英米のコロニストの悪事と植民地における文化的衝突を批判するため、アメリカの商人の事故死を口実にした中国における英国の軍事的抑圧と搾取を描いている。この戯曲は現代の現代から遠く離れた時空間に設定されている。しかしその意図するところについていえば、「抑圧者／被抑圧者」という不平等な権力構造とその間で起こる衝突は、21世紀においても広くみられる。政治や軍事紛争によって引き起こされる難民問題、資本主義による労働者の搾取は、いまだに持ち上がっている。

2012年に邱坤良教授の研究プロジェクト「人民は間違わないか？『吼えろ、中国』：トレチャコフとメイエルホリド」に参加した際に、論者はこの戯曲がソ連邦内の多くの共和国、ヨーロッパ、南北アメリカ、アジアの多くの国々で上演されたことを知った。この演劇に関しては多くの先行研究もあった。ポーランドの演出家の「古い脚本の現代における解釈」は、どのようにしてアジテーション演劇が注目を集め、様々な文化的な文脈において琴線に触れることができたのかという問題を提起した。間違いなく『吼えろ、中国』は、物語の舞台となっている中国で大いに注目を集めた。脚本は何度も翻訳／書き換えがなされ、上海、南京、北京、その他の都市、そしてまた日本の植民地だった台湾で上演された。中国文化圏における脚本の翻訳と舞台上演の歴史は、社会的・政治的な情勢と緊密に結びついていた。日本・中国・台湾における『吼えろ、中国』の舞台上演史については割合に豊富な研究がなされているが、脚本の翻訳に関する研究はどちらかといえば乏しい。

本論は翻訳史研究のアプローチを取り入れることを目指す。イスラエルの文化記号学者イタマー・イーヴン・ゾウハーの「文学的ポリシステム」の理論、そしてベルギーの研究者アンドレ・ルフェーヴルの「操作 manipulation」「書き換え rewriting」「支援 patronage」といった重要な概念を用いることで、論者はどのようにして社会システム（イデオロギー、支援）と文学システム（翻訳者とテキスト）の相互作用が、『吼えろ、中国』の脚本翻訳に影響したかを明らかにする。

キーワード：セルゲイ・トレチャコフ、『吼えろ、中国』、翻訳理論、文学的ポリシステム、書き換え

Session 1-2 セルゲイ・トレチャコフ 13:50-14:10

ロシア極東におけるトレチャコフと「トゥヴォルチェストヴォ」

スティーブン・リー (カリフォルニア大学バークレー校)

セルゲイ・トレチャコフの『吼えろ、支那』(1924年の詩、1926年の戯曲)や『鄧惜華』(1927年)のような、アジアに関する今ではよく知られている作品は、西欧のエキゾチズムと中国趣味から脱却しようとする試みだった。しかしながら、アヴァンギャルドよりもむしろ自然主義の美学を採用して中国の労働者を描くことによって、彼が実際にはヨーロッパ中心主義的なアジア観を強化したのではないかという学術論争がなされてきた。本発表は、それ以外のアジア人、つまり彼が最初に中国を訪問するより前の1920年代初めにウラジオストックで出会った日本人や朝鮮人の描写に目を向けることによって、この議論に加わるものである。ここで、彼がTiutiu^{チウチウ}やZhen'Shen'という「アジア的」なペンネームを使用して書いたコラム記事や、彼が設立者の一人だった未来派雑誌『トゥヴォルチェストヴォ (創造)』におけるアジア表象を取り上げる。扇動的な短歌詩とそこで日本語を使用する彼の試みについては、とりわけ注意を払いたい。これについてはモダニズム的オリエンタリズムというもっと大きな伝統(例えばエズラ・パウンドとセルゲイ・エイゼンシュテインの中国語への関心)との関連から考察する。これらのトレチャコフの作品はまだエキゾチズムと非ヨーロッパ言語の異化作用の可能性に引きつけられており、その結果として芸術的には革新的だが後の彼に見られるような民族誌的迫真性への執着が欠けていることが明らかになる。言語的・異文化間の媒介性の克服に関心が生じるのは、彼の中国滞在とつかの間の極東共和国の教育省での勤務の後なのである。

Session 1-3 セルゲイ・トレチャコフ 14:10-14:30

トレチャコフ『デン・シーフア』における共感の問題

亀田 真澄 (中京大学)

本発表では、1920年代から1930年代にかけて活躍した、ソ連の劇作家、作家、詩人、文学理論家のセルゲイ・トレチャコフによる、中国人青年の自伝を装った作品『Den Shi-kua』(1930)を扱う。現代において彼の作品はあまり読まれていないものの、トレチャコフはセルゲイ・エイゼンシュテイン、ベルトルト・ブレヒト、ヴァルター・ベンヤミンの理論にも影響を与えたとされており、またソ連の中国への政治的介入に関しても、ソ連国内において一定の役割を果たしていたとされている。

トレチャコフは1924年から1925年にかけて、北京大学のロシア語教員として中国に滞在しており、その後も当時の教え子たちとの交流を続けた。1926年から1927年にかけては、元教え子で当時モスクワに滞在していた Gao Shi-khua へのインタビューをほぼ毎日のように6ヶ月にわたって行い、彼のライフヒストリーを一人称で記述したものを、自伝形式の『Den Shi-khua』としてまとめた。ただし、最終的に主人公が共産主義者になったのかどうかがよくわからないという結末になっており、これは当時のソ連で一般的であった、次第に政治な意識を強めて共産主義者になっていくという(road-to-consciousness)物語には必ずしも合致しないために、批判を受けることにもなった。また脚注等でトレチャコフが Gao Shi-khua の語りへの懐疑を明らかにするなど、読者による感情移入をあえて難しくする手法が採られていた。

また、トレチャコフの初期の作品では、一人の主人公を作らずに苦しむ群衆を切り取ってモンタージュするという手法が取られることが多かった。『吼えろ中国』(1925)もこの手法で描かれている。しかし『Den Shi-khua』など、1920年代後半から1930年代のトレチャコフの作品においては、一人の人生に焦点を当てた上で、そのような人物を増殖させるという手法を指摘できる。すなわち、一人に焦点を当てながら、そのような人物はいくらでもいると強調する手法であり、これはトレチャコフのホルホーズでの2年間の滞在中に書かれた、ホルホーズについての作品群の特徴でもある。

本発表では以上の2点に着目しながら分析するが、そのなかで、『Den Shi-khua』のライフヒストリーに類似しているのは、むしろアメリカ連邦作家計画 (Federal Writers' Project) による、社会的弱者のアメリカ人たちのオーラル・ヒストリーを記録するという1930年代後半のプロジェクトであったことにも言及したい。『Den Shi-khua』は、トレチャコフの盟友ヴィクトル・シクロフスキーがかかわった、囚人のライフヒストリーを収集したソ連の記念刊行物『スターリン記念白海バルト海運河建設の歴史 一九三一～三四年』(1934)よりも、アメリカ連邦作家計画による「スレイヴ・ナラティブ・コレクション Slave Narrative Collection」や、『これが我々の生 *These Are Our Lives*』(1939)に近いものだ。

Session 2-1 村山知義 15:30-15:50

モダニズムとしてのプロレタリア芸術運動と村山知義

——築地小劇場から上海芸術劇社へ

中村 みどり（早稲田大学）

中国現代文学・演劇の分野において、文学団体「創造社」のメンバーである中国人日本留学生たちが主軸となり、帰国後上海で学生演劇グループと合流して創設した「芸術劇社」は、中国初のプロレタリア演劇団体として知られている。1929年秋に創設され、国民党政府の弾圧により1930年4月に封鎖されたため、芸術劇社の活動は1年にも満たない。しかしながら、芸術劇社が結成されるまでの準備段階、その演劇活動と連動した芸術雑誌の刊行や人形劇の公演にまで視野を広げれば、社会の矛盾をすくい上げアジテートするだけでなく、日本やソ連の前衛的な演劇スタイルを取り入れ、文学、音楽、美術、映画を横断する新たな総合芸術としての演劇の場をつくり上げることに芸術劇社のメンバーたちが情熱を注いでいたことがうかがえる。彼らの姿勢に大きな影響を与えたのが、中国人留学生たちが演劇実習のために通った東京の築地小劇場であり、留学生たちと直接交流を持った村山知義であった。

本発表では、芸術劇社の活動とともに、前史にあたる中国人留学生たちの日本におけるプロレタリア演劇の受容、芸術劇社と関わりの深かった総合芸術雑誌『大衆文芸』の誌面づくりおよび人形劇団「木人戯社」の公演内容、そしてこれらの総合的な芸術運動を支えた人的ネットワークについて紹介する。なかでも、日本初の近代演劇の劇場としてスタートした築地小劇場、およびダダイストとして出発したドイツ留学経験者の村山知義が中国人留学生の文芸活動にどのような影響を与え、芸術劇社が展開したプロレタリア演劇の萌芽となったのかをたどる。これらの分析を通して、これまで言及されることが少なかった、半植民地的な国際都市上海で誕生したプロレタリア演劇が有したモダニズムとしての性質について、また1920年代末から1930年にかけての中国における表現の追求について再考することを試みたい。

Session 2-2 村山知義 15:50-16:10

村山知義が描いたドイツ

西岡 あかね (東京外国語大学)

いうまでもなく、村山知義の芸術家としての出発点には 1922 年のベルリン滞在があった。挫折した革命と右派の相次ぐテロ、戦時賠償問題の紛糾とインフレーションの高進など、この時期のドイツは「ワイマル共和国の最もめまぐるしい、最も波乱に富んだ時期」(D. ポイカート)にあたる。また、文化領域においても同様の状況がみられる。当時のベルリンでは、ドイツ革命の影響下で発生したベルリンダダが退潮してゆく中、戦前からの運動を引き継ぎつつ国際的展開を図るイタリア未来派や、東欧から流入した構成派とオランダの新造形主義、さらに戦後の混乱期にドイツ各地の地方都市を拠点に新たな運動を展開した表現主義の第二世代など、新旧様々な前衛芸術のイズムやグループが入り乱れて活動し、国際的ネットワークを形成していた。

この坩堝のような大都市ベルリンの体験が、関東大震災後の新興モダン都市東京を舞台に村山が展開した多彩な前衛芸術活動の原動力になったことは、既に多くの研究者によって指摘されている。しかし、これまであまり注目されていないようだが、このベルリン体験は、プロレタリア文学作家としての村山にとっても重要な契機となっている。事実、村山がマルクス主義に関心を持ち始めたとされる、1926 年に書かれたダダ的要素を残すテキストだけではなく、その後のリアリズム的かつ明確に傾向的なドラマや小説においても、繰り返し 1922 年のベルリンが描かれている。その際、プロレタリア文学に対する村山自身の立場の変化と連動する形で、描かれたベルリンのイメージも変化し、記憶は書き換えられてゆく。すなわち、アヴァンギャルド時代の余韻の残る時期に描かれた、革命芸術としての構成主義の前段階たる、カオスのネオダダの都としてのベルリンは、1927 年以降のテキストにおいては、(作者自身の分身ともいえる)主人公の小市民的日本人インテリが体験する階級闘争の舞台に姿を変える。

この、村山におけるベルリン像の変化は、1930 年前後から、国際主義の強化に伴って、ドイツの運動との連携が日本のプロレタリア文学運動全体の重要なテーマとなったプロセスとも無関係ではない。従って、村山のテキストにおけるベルリンのイメージの変遷をたどることで、日本のプロレタリア文学運動の中でこの都市が獲得した特権的な位置を再確認することが可能になると同時に、プロレタリア文学というインターナショナルムーブメントの各国における発展過程に見られるローカル性が浮き彫りになってくるだろう。

Session 2-3 村山知義 16:10-16:30

村山知義と朝鮮プロレタリア演劇運動

韓 然善（藤女子大学ほか）

日本プロレタリア文化運動が全盛期を迎えた頃、この文化運動には日本で生活していた朝鮮人が多数参加した。例えば作家同盟、映画同盟などの様々な団体が結成されるが、数多くの朝鮮人が活動したのは他でもなく演劇であった。当時結成された朝鮮人の演劇団体は、プロレタリア文化連盟と連帯しながら、東京や関西地域などの大都市での公演はもちろん、日本各地の工場で働いている朝鮮人労働者のために巡回公演も行った。特に東京では朝鮮人留学生、演劇人などが中心となった劇団が存在していた。1920年代後半から第三戦線社、朝鮮プロレタリア芸術同盟の東京支部、無産者社などがあり、その後は同志社、東京朝鮮語劇団、三一劇場、朝鮮芸術座などが活動を続けていた。しかしながら日本プロレタリア文化運動と在日朝鮮人との関係については最近少しずつ研究が進んでいるものの、本格的な研究はなされていない。

日本プロレタリア演劇運動と朝鮮の演劇人との関係においてもっとも関わりのある人物といえば、村山知義である。村山は当時東京で活動していた朝鮮人の劇団と交流し、朝鮮人の劇団が上演できるように助力し、自分の作品に朝鮮人の俳優を出演させるなど密接に関わっていた。1930年代後半には、自分が結成した新協劇団で朝鮮の代表的な古典作品とも言える「春香伝」^{チュンヒョクジョン}を上演し、日本で活動していた朝鮮人との交流を続けた。また村山の朝鮮への関心は彼の評論やエッセイ、戯曲、小説などからも容易く確認できる。例えば、戯曲「暴力団記」では三・一独立運動が言及されており、「金君見舞」（『中央公論』、1935年10月）や「或るコロニーの歴史」（『人民文庫』、1937年10月）では朝鮮人とのエピソードが出てくる。特に注目すべきなのは、彼の作品には朝鮮人労働者がよく描かれていることである。さらに村山と朝鮮の演劇人との関係は、朝鮮人の劇団の上演作からも見て取れる。例えば1935年に再結成した朝鮮芸術座が村山の戯曲「小学教師」（『新興教育』、1932年1月）を度々上演するなど、プロレタリア文化運動への弾圧が続いている中、演劇を媒介とした文化的な連帯感を保ち続けていた。

本発表では、1920年代後半から村山が朝鮮の演劇人とどのように交流をし、その交流が互いにどのような影響を与えたのかを村山と関連のある朝鮮の演劇人や劇団を取り上げながらみていく。また村山の戯曲・小説における朝鮮・朝鮮人像を一部踏まえながら、村山を植民地朝鮮に対置する帝国日本側の文化人と判断するのではなく、当時朝鮮の演劇人とどのようなことを共有し、交流していたのかを考察する。

Session 3-1 ジェンダー、セクシュアリティ、労働 10:00-10:20

ハウスキーパー問題論

——湯浅克衛「焰の記録」

ヘザー・ボーウェン＝ストライク（デポール大学）

1920年代、近代文学は「色から愛へ」（佐伯順子）、「家制度」から「近代恋愛結婚イデオロギー」（鈴木みち子）へと情動が変容する場であった。ブルジョア小説と同様、プロレタリア文学もまた、情動の変容をめぐる論争の場であったが、その議論の多くは、「ハウスキーパー問題」によって発生された恥辱とともに葬り去られてきた。その用語には今も賛否両論があるが、「ハウスキーパー」とは、プロレタリア運動に共鳴する若い女性たちのことで、彼女たちは弾圧が強化される中で、地下の男性活動家の外見上の妻として満足な隠れ蓑を提供した。「ハウスキーパー問題」は、プロレタリア文学を語る上で欠かせないものである。

湯浅克衛の「焰の記録」は、宮本百合子の「乳房」と同じ1935年4月、雑誌『改造』に掲載された。両作品とも、「ハウスキーパー問題」を取り上げ、革命運動の中で女性の愛と欲望と情動がどう変化するかをフェミニストの視座から書いている。湯浅克衛は、主人公の縫子を用いて、家制度だけでなく中産階級の「恋愛結婚イデオロギー」をも超越した新しい愛の物語を書いたのである。物語の大部分は、回想によるプロレタリア教養小説であり、偽装転向の絶望と無慈悲な母の葬儀のために朝鮮に戻るという現在時によって枠づけられている。このフレームが楽観主義を弱める一方で、縫子の成長の軌跡は、オルタナティブな情動としての同志愛の探求として注目に値する。

湯浅は、縫子に運動の坩堝の中で知的にも性的にも成長させる。それは、社会主義者の男性・融のおかげであった。彼女は、韓国で融と出会い、再会に東京まで出奔し、そこで偽名で同志として、そして逮捕されるまでの間、仮の妻として過ごした。しかし、融の逮捕は彼女の成長の一段階でしかなく、その後、中央執行委員のハウスキーパーを志願するところの精神的な男に想いを寄せるなど、より深く運動に関わることになる。闘争に参加することで、彼女は同志愛を理解するようになった。ハウスキーパー問題という恥辱を葬り去ることなく、ハウスキーパー問題という杭が運動の中心に打ち込まれた瞬間に、それを抑圧の中での女性の成長の物語に利用した湯浅の手腕は注目に値する。

Session 3-2 ジェンダー、セクシュアリティ、労働 10:20-10:40

社会的再生産を可視化する

——宮本百合子「乳房」におけるリアリズムと情動

飯田祐子（名古屋大学）

本発表では、プロレタリア文学における社会的再生産の領域について検討する。「社会的再生産」という用語は、「人間を育む仕事」を指す（シンシア・アルツァ、ティティ・バタチャーリヤ、ナンシー・フレイザー『99%のためのフェミニズム宣言』原著 2018、人文書院、2020）。育児やケアといった女性化された労働に目を向け、その不可欠性と不可視性を論じるための概念である。ナンシー・フレイザーらは、資本主義社会を「公的な経済を支えている明らかに「非経済的」な関係性や慣習を包み込む、一種の制度化された社会秩序」と説明し、「資本主義社会では、社会的再生産の営みはジェンダーという基盤の上にある」と指摘している。こうした領域の配分は、プロレタリア文学の中にも構成されている。本発表では、社会的再生産を可視化した作品として、宮本百合子「乳房」（『中央公論』、1935.4）に注目したい。

「乳房」は、宮本百合子自身の言葉によれば、「プロレタリア文学の運動に参加してからの一番まとまった、努力した作品」（「あとがき」『宮本百合子選集』第四巻、安芸書房、1948.1）である。素材となった荏原無産者託児所は、左翼運動の一部として一九三一年に設立され、労農救援会とともに活動を展開したが、一九三二年には保母たちが検挙された。宮本百合子は、一九三三年に荏原託児所を取材しており、本作はそれをもとに執筆されている。舞台は託児所なので育児をめぐる問題が記述されているのは当然であるが、それだけではなく、差し入れなどの獄外の「救援」活動や、感情労働と家事を行う妻やハウスキーパーの役割など、「乳房」には、社会的再生産に関わる問題が様々に取り上げられている。

同時代評では、「日常」を書いたと評される一方で、女性的な記述かどうか問われているが、周縁的な女性たちの仕事を記述することの意味については全く関心が向けられず、全く評価もされていない。ふたたび宮本百合子の言葉を引用すれば「この小説に描き出されている様々の情景はすべて——東交某車庫の集会、托児所生活の雰囲気、市ヶ谷刑務所面会所の風景、特高警察の乱暴そのほか、みな現実のうちから作者としての生活的実感を添えて切りとられて来ている断片である」（「解説」『風知草』文芸春秋選書、文芸春秋新社、1949.2）と説明されており、リアリティを表現するべく書かれた作品でもある。発表時は、社会主義リアリズムが唱えられていた時期であり、リアリズム的な記述における「日常」という素材と、情動的でジェンダー化した語りとの関係に注目しつつ、同時代の評価では受け取られなかった、社会的再生産を可視化することの意義を論じたい。

Session 3-3 ジェンダー、セクシュアリティ、労働 10:40-11:00

恋愛から同志愛へ

——満洲国女性作家・但娣の文学

羽田 朝子（秋田大学）

満洲国を代表する女性作家の但娣（1916～92）は、1930年代後半から40年代初頭にかけて日本に留学し、文学活動を開始した。帰国後は満洲国で新進の女性作家として活躍したが、1943年に満洲国から脱出をはかった罪で日本の憲兵隊により逮捕され、実刑を科せられた。日本の敗戦後も女性作家として活動するが、中華人民共和国の成立後、60年代から始まる文化大革命で「日本のスパイ」として厳しく批判された。1980年代に満洲国文学の再評価が始まると、但娣の文学も注目されたが、その際に重視されたのは、作品に現れた抗日意識や植民地支配への批判であった。しかし但娣の作品はそれだけに留まるものではない。

本報告では次の二点に着目する。一点目は、但娣の作品は一貫してプロレタリア文学的な特徴をもっており、それが「越境」——国家間の移動や政治体制の変動のたびに深化していることである。二点目は、その文学や思想の背景には、満洲国作家で恋人の田瑯（1917～？）の存在があり、彼による抑圧の経験もまたその文学に大きく影響していることである。これを踏まえ、本報告ではプロレタリア作家としての但娣の作品を再検討し、植民地支配の経験に加え、越境や性的抑圧の経験が、いかにその思想に影響を与え、文学に反映されたのかを明らかにしたい。

但娣は1935年に黒竜江省立女子師範学校を卒業後、故郷のチチハルの小学校で勤務していた際、中国東北部の左翼文藝界の中心人物であった金劍嘯（1910～36）の文学に触れ、感銘を受けている。1937年に満洲国の官費で日本留学し、中国語雑誌『華文大阪毎日』（以下、『華毎』）で作家活動を始め、数々の作品を発表した。その作品はいずれも下層階級の苦境をモチーフにするなど、プロレタリア的な特徴を持っていた。

但娣には田瑯という文学や思想上の同志がおり、二人はチチハルでともに左翼文藝に共鳴し、同時期に日本留学し、同じく『華毎』で活躍した。とくに但娣の作品には田瑯からの影響が見られる。しかし男女関係の上では、田瑯には故郷に妻がおり、また他にも複数の女性と関係をもつ一方で、但娣に対しては性的束縛を強いるなど、抑圧的な関係性にあった。初期の但娣の作品では、男女の恋愛が至高のものとして無批判に描かれ、男女間の問題に視点が置かれることはなかった。例えば代表作「安荻和馬華」（1940）では性的な束縛を見せる男性主人公に対し、ヒロインはそれを愛情表現として受け入れている。しかし1941年に田瑯との恋愛が破綻し、42年に帰国して満洲国文壇で地歩を固めると、「戒」（1943）においてヒロインの不実な男の性的搾取に対する憤りを描き、最後には「なすべきこと」や「責任」のために生きる覚悟を決める姿を描いている。また「伝屍病患者」（1942）では、愛する男性との別れを選び、「勇敢で遙かな跋涉」へと向かう少女が描かれている。

これらの作品では女性が向かう先について具体的に示されていないが、日本の敗戦後に発表された作品「早晨七点的時候」「伙伴」（1946）では、それが抗日や社会主義革命として明示され、同志間の連帯が主なモチーフとして描かれた。中華人民共和国成立後は、社会主義体制のもとでルポルタージュを多数発表し、社会主義革命により労働環境が改善され、あらゆる苦悩から解放された女性たちの姿を描いている。

Session 4-1 移民、植民地、東アジアの表象 13:00-13:20

モダニズムのレンズを通してリアリズム文学を読むことについて

——廉想渉と金南天の場合

朴 宣榮 (南カリフォルニア大学)

1920年代・30年代の国際的なプロレタリア文学運動は、同時代に世界的に花開いた美的なアヴァンギャルドとは対極にあるものと長い間みなされてきた。リアリズムとモダニズムに関する理論的な議論において、実際の、そして想像上の反目が固定化してしまい、それ以来ずっと文学・文化批評の一般的な見解となってきた。しかし、ここ数十年の修正的な研究が、モダニズムのレンズを通してプロレタリア諸文学を再発見するようになり、その抑圧された歴史性や美的な豊かさを取り戻しつつある。さらに広いコンテキストにおいて、こうした学術的な展開は、モダニティの歴史的な経験に対する特権的で最も痛烈な美的応答としてモダニズムをとらえなおす機運と密接にからんでいる。

植民地朝鮮のよく知られた二人のプロレタリア作家、廉想渉(1897-1963)と金南天(1911-1953)を読むことで、こうした新しい解釈のパラダイムの評価を行うのが本稿の目的である。廉と金はどちらも主としてリアリズムの実践者として記憶されている。廉は『万歳前』と『三代』のような作品の植民地化された国の写実的な描写でよく知られている。しかしながら、見直していくと、彼の初期作品は、コロニアルな自己の内面を表象するために、告白体の私小説の文学的技法を用いる実験の試みだったことも明らかになる。同じように、写実的な叙事小説『大河』によって名高い金も、再解釈を通して、断片化されたアヴァンギャルド小説『緑星堂 The Green Star Pharmacy』を書いたこともあきらかになっている。これらの事例研究は新しい解釈のパラダイムがいかに生産的で啓発的なものでありうるかを示している。後付けで挟み込まれたリアリズムとモダニズムの分割を超えて二人の作家を読み直すことで、植民地的モダニティへの彼らの美的な関与手法と、彼らが主たる役割を果たしたプロレタリア文学運動の美的な範囲について、よりニュアンスに富んだ識見を得ることができるようになる。

上述の修正的な読み方を進める中で、本稿ではこれまで研究が少ない廉想渉と大杉栄、そして金南天と戸坂潤の知的関係を探る。結論として、プロレタリア文学のモダニズム的な再読によって、その歴史的な性格と生きた関係性についての私たちの理解を新しくすることが可能になる。同時に、この文学が植民地朝鮮その他で果たした重要な社会的機能という観点を失わなうことがあってはならない。すなわち、十分な権利も表象も与えられないような生活体験とその根底にある資本主義のロジックを記録し暴露すること、フレドリック・ジェイムソンの言う「認知地図」の美学のことである。プロレタリア文学の研究者である私たちは従って慎重に進まなくてはならない。

Session 4-2 移民、植民地、東アジアの表象 13:20-13:40

語らぬ少女の語るもの

——楊振声「搶親」と『独立評論』

杉村 安幾子（日本女子大学）

中国の作家楊振声（1890-1956）は、魯迅が「極力人民の間の苦しみを描写しようと努めた」（『中国新文学大系』小説二集序、1935）と評した通り、漁民や労働者など、社会の最下層の人びとを主人公とした短篇を主に 1920～30年代に執筆した。コロンビア大学やハーバード大学での留学経験など、恵まれた経歴を持ち、教育行政エリートしての道を歩んでいた楊の心の内には、北京大学在学中に五四運動に参加し、逮捕投獄された時の熱い思いがあり続け、それが創作にも反映されていたといえる。

楊の短篇には「搶親」（1932）と「報復」（1934）という 2 篇がある。ともに中華民国期の強奪婚をモチーフとしており、元々作品数は多くない中、短期間に重複したテーマで創作した珍しい例となっている。楊振声研究史において、創作研究の対象は中篇小説『玉君』のみに集中しており、この二作については「売買婚と武力での強奪婚といった漁村の立ち後れた風習」や「下層労働人民の生活」を描いたと簡単に紹介されるばかりで、中国本国における専論はない。発表者も以前この二作を取り上げた論文においては、強奪婚というモチーフに着目し、「搶親」については清末・民国期における新聞報道を通じた強奪婚のありようを調査した上で、親が子の結婚相手を決めるという旧来の封建的婚姻に批判の目を向けた作品ではあるものの、そこには主体としての女性は存在しないと結論づけた。

発表者のこの解釈は、とりあえずは論旨に破綻のないものではあったが、「搶親」の掲載誌である『独立評論』という重要な陣地が完全に見過ごされている。『独立評論』とは、1932年5月に北平（北京）で創刊され、編者は楊振声の友人胡適が務めていた。胡適による創刊号の序言は、「国家と社会の問題を討論」しながらも、「主張が完全に一致することも期待せず、ただ各人が自らの知識に基づき公平な態度で中国の当面の問題を研究することだけを期待し」、「いかなる党派にも依らず、いかなる既成概念も盲信しない」というもので、寄稿者も欧米留学組が中心であり、全体として欧米的な雰囲気のある刊行物であった。楊振声はこの『独立評論』に「教育問題について語る」「女子の自立と教育」「民族の復興に関するある問題」などの論稿を寄せている。楊振声以外の寄稿者による論稿も、「憲政問題」（胡適）、「中国の教育危機の分析」（何思源）、「人材と政治」（陳衡哲）など、1930年代の中国の情勢について当時の知識人たちが各方面から分析考察しているものが多い。逆に言うと、政治的時事的論稿がほとんどであるのに対し、楊振声の「搶親」のみが短篇小説であり、言わば浮いた存在となっている。

本発表は、「搶親」を改めて『独立評論』の中に置き、読み直した時に見えて来る風景を考察するものである。「搶親」単体を読むのではなく、1930年代の楊振声と同時代の知識人の問題意識と絡めて『独立評論』を読むことで、発表者が「搶親」を読んだ時には見過ごしてしまっていた点に光を当てていく。それによって、不在であるように見える女性登場人物が、作品中では何も語らずとも、実際には当時の中国が置かれていた状況を雄弁に物語っていたことを明らかにしたい。

Session 4-3 移民、植民地、東アジアの表象 13:40-14:20

1930 年代の台湾文壇に交差する二つの前衛

——楊逵と風車詩社

陳 允元（国立台北教育大學）

[通訳] 張 文聰（長榮大學）

日本による植民統治下の 1920 年代に誕生した台湾新文学は、文学の成熟と外部の政治環境の変化に伴い、1930 年代には、二つの前衛が発展し始めた。一つは、楊逵（1906-1985）に代表される抵抗精神を重視し、左翼運動の色彩を持つ現実主義文学であり、もう一つは、1933 年に設立された風車詩社に代表される、芸術的純度を重視し、シュールレアリズムなどさまざまな文学技法を取り入れた現代主義文学である。しかし、これまでのところ、そのテキストのジャンルの違いから、小説を書く楊逵と、詩を中心とする風車詩社は、直接一緒に論じられることはあまりなかった。また、「詩は現実から離れれば離れるほど純粹になる」と主張する風車詩社の文学作品は、現実とは無縁の、あるいは現実から逃避したものとみなされ、論者はしばしばその文学と現実との関係に対する深い思索を見過ごしてきた。だが実際には、楊逵と風車詩社の文学における現実観と文学的実践の間には、相互に呼応し、対話する弁証法的な関係があり、このことは改めて注目に値する。

1935 年から 36 年にかけて、楊逵は風車詩社の中心メンバーである李張瑞（1911-1952）、楊熾昌（1908-1994）との間に、芸術の大衆化、文学と現実との関係をめぐって、小規模の論争を繰り広げた。論争の前後には、風車の同人は詩のほか、独特のスタイルを持つ小説をいくつか発表した。例えば、楊熾昌の「貿易風」（1934）、「薔薇の皮膚」（薔薇の皮膚、1937）、李張瑞の「窓辺の少女」（窗邊的少女、1934）、「嫁取りと嫁入り」（娶嫁送嫁、1934）などである。これらの小説は、モダニズムの手法を用いた一方、封建的な伝統や植民地の現実に対する諷刺と批判を含んでいた。こうしたモダニズムの美学と現実的な関心が融合した創作は、その系譜を遡れば、『詩と詩論』の同人が、主宰者である春山行夫（1902-1994）の純然たる形式主義や現実から乖離した傾向に不満を抱き、1930 年に『詩・現実』を別に組織し、創設したことにとどりつけるだろう。風車詩社の文学における現実観は、楊逵のように現実を反映し、現実介入することを追求したわけではない。だが、現実とは無縁の、あるいは現実から逃避しようとするものでもなく、現実を転化し、超越しようとするものであった。楊逵と風車詩社に代表される二つの前衛には、引力と斥力が同時に存在し、時に一致し、時に衝突した。彼らはともに封建的な伝統に抵抗し、植民地主義と階級の抑圧に抵抗し、消費主義の大衆文学に反対した。しかし、新文学の「新」なる追求、および文学と現実との関係の理解については、それぞれ別の道を歩むことになった。二つの前衛の間的一致と衝突は、ともに 1930 年代の台湾新文学の発展を推し進めたのである。

本論は、1930 年代中期の楊逵と風車詩社の文学言説と小説創作を読み解き、文学と現実との関係をめぐって展開される彼らの思考と実践を探り、それによって台湾新文学の二つの前衛を、共時的かつ相互に交渉し、また交錯した弁証法的関係の中で再解釈しようとする試みである。

キーワード：楊逵、風車詩社、前衛、芸術大衆化、純粹性、モダニズム、台湾新文学

（田村容子訳）

Session 5-1 翻訳、プロパガンダ、アダプテーション 15:30-15:50

浮浪者から革命家へ

——日本におけるゴリキー文学の受容をめぐって

ブルナ・ルカーシュ（実践女子大学）

マキシム・ゴリキーの文学は世界を二度も席捲したと言われている。本国ロシアの文壇に登場して間もない 20 世紀初頭にゴリキーの作品が外国語に翻訳されると、彼が執拗に描きつづける下層社会の「偉人」の放縦な生活ぶりや、多くの人物に共有される「放浪者哲学」が各国の読者を驚愕させ、ゴリキーがまたたく間に世界文壇の寵児となった。その後、亡命による生活環境の変化とそれともなう創作内容の変化もあり、ゴリキーの文学が影響力およびその認知度が低下しつつあったが、1920 年代に、プロレタリア文学の台頭にとともに、ゴリキーはその先駆者として再び注目を浴び、世界文豪の地位を不動のものとした。

日本におけるゴリキーの受容およびその評価もまた似通った展開を見せる。1901 年に日本ではじめて紹介されたゴリキーは日露戦後に一躍人気作家となり、小説の翻訳は毎月のように発表され、その思想が活発に批評されるようになった。明治末期以降はゴリキーの作品は下火となったが、1920 年代には華々しく文壇に返り咲き、全集が二度も編纂されるほど注目されることになった。

このように盛んに読まれていたゴリキーの影響は、これまで主にプロレタリア文学との関連において論じられることが多かった。例えば、昇曙夢は、20 世紀初頭の日本の読者はゴリキーに「偉力と勇猛と人生の美」を見出しその作品を愛読したが、ゴリキーの思想は日本文学に対してはさほど大きな影響を及ぼしていない、と『ゴリキーの生涯と芸術』（ナウカ社、1936 年 7 月）の中で述べている。中野重治も、明治期の作家たちは「ゴリキーに対して生き生きした興味を持つ必要が自分として感じられなかつた」ため「ゴリキーから受けた影響はかなり小さかつた」（「ゴリキーと日本文学」『文学評論』1936・8）と記しているが、同様な見解は戦後も長年踏襲されつづけた。

しかし、筆者が既に示してきたように、ゴリキーの文学、ことに初期の〈浮浪者もの〉は、小栗風葉や石川啄木など明治期の著名な作家たちに深甚な影響を及ぼし、この時期の放浪・漂泊をめぐる言論の形成に著しく寄与している。

本発表では、従来の研究成果を踏まえつつ、日露戦後から 1930 年代前半にいたるまで、文学思潮の変遷を背景にしてゴリキーの受容のあり方がどのような展開をとげたかを検討していきたい。これにより、浮浪者の生活を描く作家から革命の正当性を説く作家へというラディカルなイメージ・チェンジの過程が照らし出されるとともに、〈浮浪者もの〉を思想上否定せざるを得ない立場に置かれたプロレタリア文学の作家たちの多くが、これらの作品を読みつづけ、そこから少なからぬヒントを得たことも示される。

Session 5-2 翻訳、プロパガンダ、アダプテーション 15:50-16:10

編み合わせのアダプテーション

——千田是也と戦間期の日独アジプロ演劇

萩原 健 (明治大学)

俳優の千田是也は戦間期、日本とドイツでアジプロ演劇の実践に関わった。そこではしばしば、プロパガンダを目的としたアダプテーションが、また千田本人を仲介者(transmitter)とした文化移転(cultural transmission)が行われていた。そのありかたは多様で複合的だった。

築地小劇場で俳優として活動した千田は、トランク劇場・前衛座・人形座といった劇団で小道具・仮面・人形の制作にも携わったあと、ドイツに渡り、労働者演劇を追究した。

ドイツでは演出家グスターフ・フォン・ヴァンゲンハイムと密に協働作業をした。アジプロ隊〈赤シャツ隊〉が関わった『レビュー・インペリアリズム』では〈日本帝国主義〉の役で出演し、〈劇団 1931〉では、イギリスおよびドイツの古典のアダプテーションをしつつ中国演劇も参照していた作品『鼠落とし』で、〈小道具係〉として出演予定だった。

日本に帰国すると、アジプロ隊〈プロレタリア演芸団〉の活動に関与した。隊は千田の提案で、ドイツのあるアジプロ隊の名にちなんだ〈メザマシ隊〉へ改称し、ドイツのアジプロ隊の実践を積極的に参照した。ただしその一部は、上記が示すように、中国や日本の演劇の要素を取り入れた実践だった。

このように、千田が関わった日独アジプロ演劇の実践は、実に複合的なアダプテーションであり、送り手と受け手の関係が複雑に絡み合っていた。それらはさながら、多様な文化圏からの出典の「編み合わせ(interweaving)」(Fischer-Lichte)によるアダプテーションとして成立していた。

Session 5-3 翻訳、プロパガンダ、アダプテーション 16:10-16:30

翻訳とプロパガンダ

——1950 年代のルーマニアにおける日本のプロレタリア文学

イリナ・ホルカ（東京大学）

日本とルーマニアは地理的に離れており、言語的ないし文化的に共通するものがほとんどない。また、本報告で論じようとする 1940 年代後半から 50 年代にかけての時期において、日本は（押しつけられて）アメリカと親密になった資本主義国家であり、ルーマニアはソ連やスターリン主義の直接的影響下にあった共産主義国家であったというように、政治経済体制も正反対であった。2つの国に共通しているのは、日本語とルーマニア語がともに「マイナー」言語、それと同様に日本文学やルーマニア文学が「マイナー」文学に通常は区分されることである。「マイナー」文化として、両国は「翻訳文化」を主としており、つまり、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての近代化には、英語やロシア語、フランス語やドイツ語といった様々な「メジャー」言語からの翻訳（あるいはそれらを介しての重訳）が不可欠な試みだったのである。

本報告では、まず、第二次世界大戦前にルーマニアと日本が接触した過程を簡単に説明し、戦後における文学作品の翻訳を通じた両国の文化交流の概要を述べる。1960 年代の世界主義的傾向を持つ雑誌『Secolul XX (20 世紀)』で紹介された新しい翻訳理論を背景として、英語やフランス語を介してルーマニア語に重訳されて同誌に掲載された日本の詩についての考察（Holca 2019）、および、日本の詩の翻訳集と、チャウシェスク政権の最後の 20 年間に広まった「重訳」や翻訳者の職業化に関する考えとの関係についての考察（Holca 2021）といった、両国の交流に関する報告者のこれまでの成果をまとめたい。

次に、チェウシェスク以前のルーマニア、つまり第二次世界大戦直後のソ連の影響が最も強かった時期に焦点を当て、徳永直の『太陽のない街』（ドイツ語、1948 年）や『静かなる山々』（ロシア語、1952 年）、タカラ・テル（高倉輝）の『ハコネ用水』（ロシア語、1954 年）や『狼』（ロシア語（推定）、1966 年）といった小説の翻訳（重訳）について触れる。そして最後に、タカラ・テルの「ぶたの歌」（ロシア語（推定）、1956 年）と共に小冊子に収録された大田洋子の短編「どこまで」の翻訳に注目する。特に、このテキストを通じて、見え隠れする反米プロパガンダの兆し、そして戦後日本に対する共産主義国ルーマニアの同情的な姿勢を形成する基礎的な物語として、ヒロシマのイメージがどのように解釈され創造されたのかを分析したい。